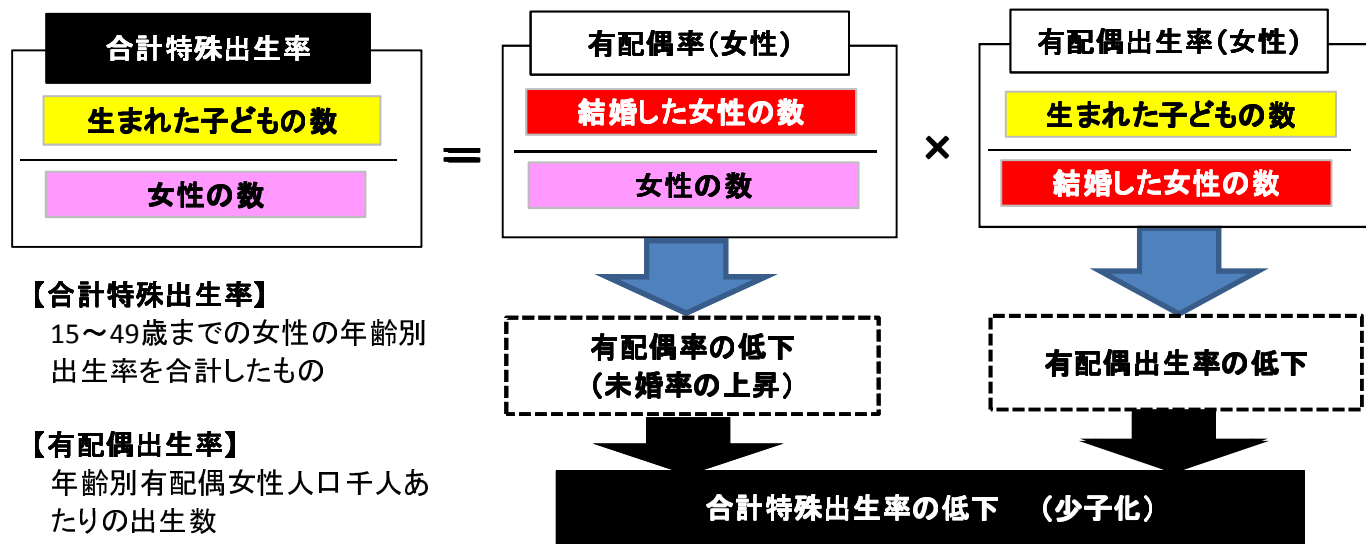


2 合計特殊出生率低下の要因 ~未婚率の上昇と夫婦の子ども数の減少~

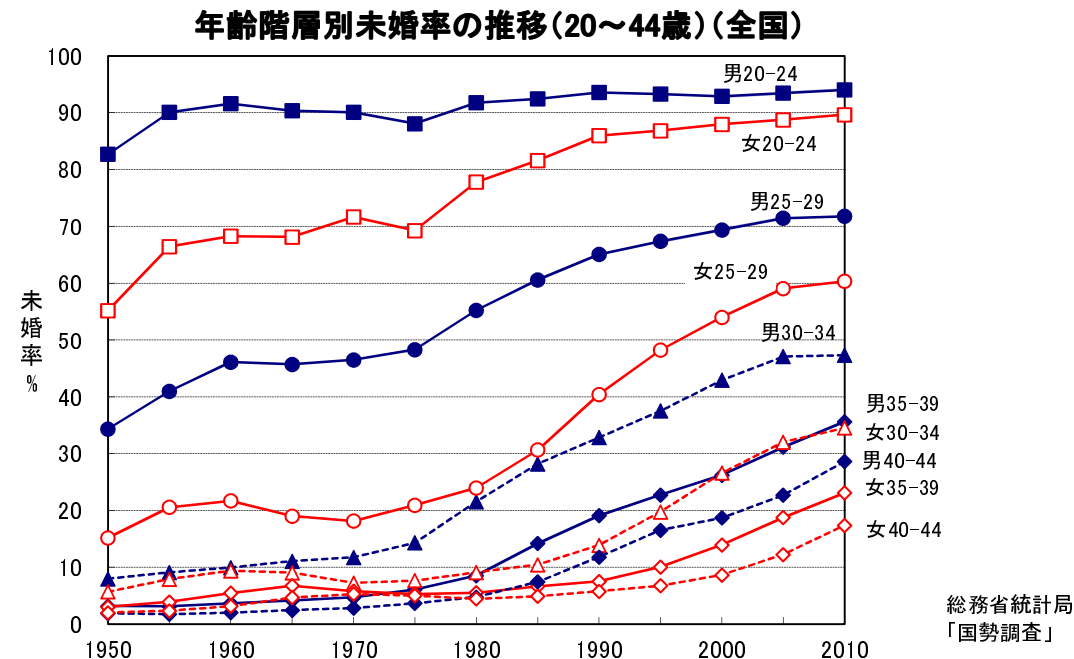
(1) 合計特殊出生率に影響を及ぼすもの

○「合計特殊出生率」は、未婚女性も含めたすべての15歳～49歳女性が生涯に生むとされる子どもの数であるため、下図のとおり、「**婚姻率(未婚率)**」と「**有配偶出生率(子どもの数)**」の2つの要素から成る。このため、2つの要素がどの程度、増加・減少しているのかを見極めることが、少子化対策検討の前提となる。



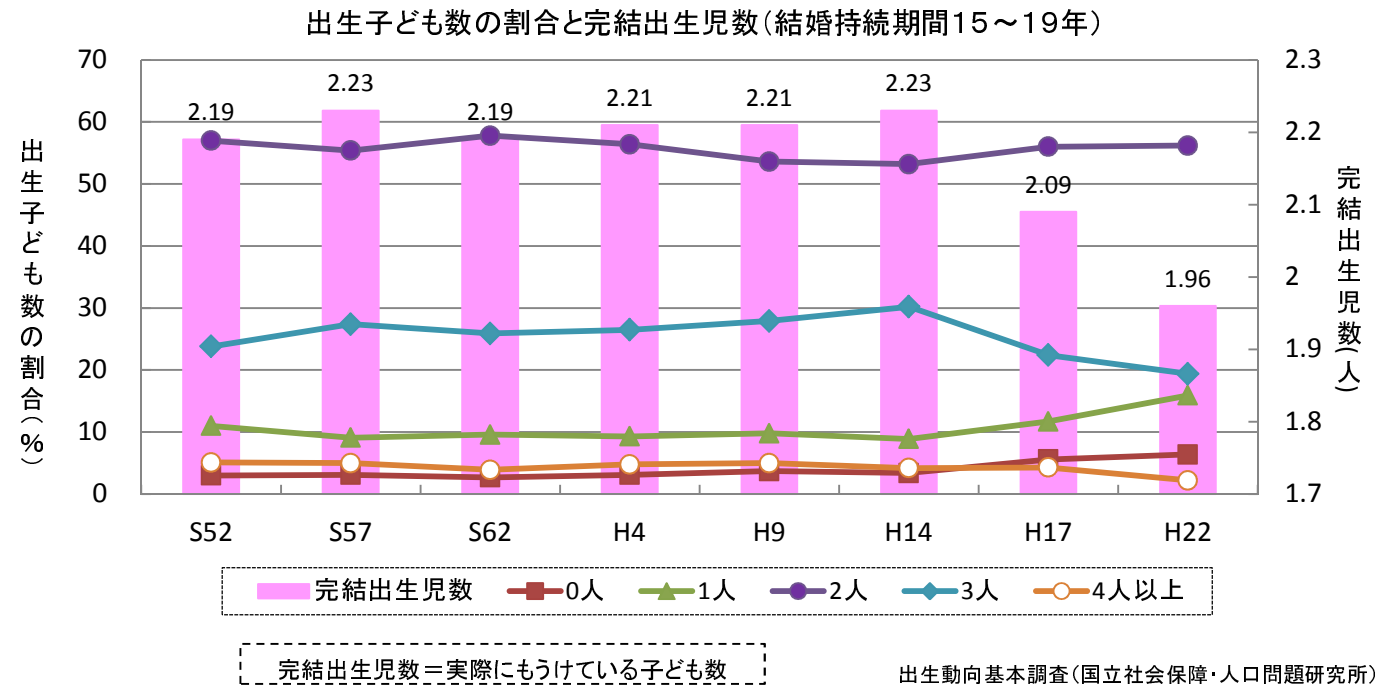
(2) 年齢階層別未婚率の推移(全国)

○**未婚率**は、1975年頃から、特に**25～29歳、20～24歳の女性**で急激な**上昇**が見られる。未婚率は、男女ともに、1975年から一貫して上昇してきたが、2005年からの5年間は上昇が減速。
 ○2005年頃までは、**晩婚化**により、**25～29歳の女性の未婚率が上昇したことが、少子化の要因**と考えられる。



(3) 夫婦の子ども数の推移(全国)

○**結婚持続期間15～19年の夫婦の子ども数の平均**は、平成17年までは「2人」を上回っていたが、平成22年には**1.96人**となり、「2人」を下回った。
 ○子ども数「3人以上」の割合は減少しているが、「2人」の割合は**30年以上にわたってほとんど変わっていない**。



(4) 夫婦の子ども数の「理想」と「予定」の差(奈良県・全国)

○「理想子ども数」は、奈良県・全国ともに「2.42人」だが、「予定子ども数」は、奈良県が「2.22人」、全国が「2.07人」。理想と予定には、差が生じている。「予定子ども数」は、奈良県の方が多い。
 ○「**予定子ども数**」が「理想子ども数」よりも低い理由は、奈良県・全国ともに、**1位が「子育てや教育にお金がかかりすぎるから**」、**2位が「高齢で生むのはいやだから**」。

